

この



この

研究

野村 真先生



Profile

のむら ただし先生

京都府立医科大学 大学院神経発生生物学 准教授

2000年3月	名古屋大学大学院理学研究科	博士後期課程修了	博士（理学）取得
2000年4月	東北大学大学院医学系研究科	器官構築学分野	助手
2004年4月	東北大学大学院医学系研究科	創生応用医学研究センター	形態形成解析分野 助手
2007年4月	同分野		助教
2007年9月	スウェーデン カロリンスカ研究所	細胞分子生物学部門	博士研究員
2010年9月	スウェーデン カロリンスカ研究所	細胞分子生物学部門	上級研究員
2011年4月	京都府立医科大学	神経発生生物学分野	准教授
2012年10月	科学技術振興機構「細胞機能の構成的理解と制御」	さきがけ研究者	（兼任）

趣味： 自然史博物館巡り、動物の骨格や解剖図のスケッチ、模型製作

はじめに

研究生活には英語が必要だ。研究者は英語で論文を書かないといけないし、英語での研究発表も日常茶飯事である。最近では日本の学会も国際化され、若い人の英語プレゼンテーション能力も随分と向上したように思う。では、英会話はどうだろう。様々な国の人と談笑したり、議論したりするというのが、日本人にはどれくらいできるのだろうか。本稿では、私の研究者人生で大きな転機となった英語コミュニケーションにまつわる体験を紹介したい。

自分は英語ができない

35歳のとき、それまで勤めていた東北大学医学部を退職してスウェーデンに留学した。仙台市のアパートを引き払い、家財道具のほとんどは岩手県の実家に預けて、妻と4歳になったばかりの娘と一緒に成田からコペンハーゲン経由便に乗った。ストックホルムに着いたときには長時間のフライトで家族全員ぐったり疲れ果てていた。

ポスドク先として決めたのはスウェーデン・カロリンスカ研究所のJonas Frisén教授の研究室だった。彼はまだ40代ながら組織幹細胞の世界的権威であり、特に私の留学直前にCell誌に発表された¹⁴Cを用いたヒト組織年齢測定法の開発は世界に衝撃を与えていた。研究室はヨーロッパ、アメリカを含め10カ国以上の学生、ポスドクで構成されていたが、私が初めての日本人ラボメンバーだった。研究室どころか、当時は研究所の細胞分子生物学部門全体で日本人は私1人で、日本語を喋るのは家族とだけという生活が始まった。

留学して、こんなにも自分は英語が喋れなかったのか、ということを感じた。スウェーデンの公用語はスウェーデン語だが、研究所での日常会話は英語であり、スウェーデンを含めすべてのヨーロッパ人は英語が堪能だった。私も日本で英語を学び、それなりに会話ができるつもりでいたのだが、そんなものはほとんど役に立たなかった。特に、ポスドクや学生同士の日常的雑談に全く加わることができなかった。彼らが今何を喋っていて、どのようなタイミングで会話に入れば良いのか皆目検討がつかない。さらにこれを思い知らされたのが、毎年Jonasのラボで開催される恒例のラボ・リトリートという行事だった。

ラボ・リトリート

ラボに参加してすぐ、Jonasから「うちのラボではラボ・リトリートというものを行っているので、タダシも是非参加して欲しい」と誘われた。毎年夏の終わりに、ラボメンバー全員が地中海沿岸のリゾート地に1週間くらい滞在して、サイエンスの議論をするらしく、その年はイタリアのサルデーニャ島という場所に行くということだった。地理に疎い私はそれまでサルデーニャ島がどこにあるのかも全く知らなかった。

サルデーニャ島は、イタリア半島の西部に位置する地中海で2番目に大きな島である。地中海性気候に恵まれ、ローマ時代からの遺跡も数多くある世界有数の観光名所であるが、ラボ・リトリートで滞在した場所は島の東部の牧羊地帯で、一面荒涼とした草原が広がっていた。リトリートでは主に午前中が研究発表の時間に費やされた。といっても自分の研究プログレスではなく、サイエンスに関して自分が面白いと思う内容だったら何でも良いということだった。午後は自由時間、夕食後はエゾテリック (esoteric : 秘密の) な内容で再び数時間のディスカッションを行った。これは、人生において自分が興味を持っていることに関して皆で話し合うというもので、「人生におけるリスクをどう思うか」「イスラムのブルカ (女性の覆面衣装) についてどう思うか」といったハードな内容から、英語早当てクイズ、ワイン・テイastingなど皆それぞれ趣向をこらしたプレゼンテーションを用意していた。

サイエンスの発表はまだ良かったが、自由時間の過ごし方とエゾテリックディスカッションには心底困ってしまった。そもそも雑談ができないのだから何を話しているのかわからないし、何も話せない。しかも行ってみて気づいたのだが、ヨーロッパ人は実に話好きだった。集まると四六時中何か喋っているのだ。すなわちこれは単に言語の問題だけではなく、言語にどれだけ依存して生きるかという問題だ。リトリートが終わって、最後に皆でレンタカーを借りて島を観光したのだが、今まで経験したことのない疎外感を感じ、中世の城壁も見事な教会の礼拝堂も、全く頭に入らないほど疲労してスウェーデンへの帰路についた。

いつになったら喋れるようになるのか？

そんなリトリートが毎年1回必ず行われ、スペインのコスタ・デル・ソル (太陽海岸) やフランスのニースなど、地中海のリゾート地を巡る旅が続いた。プライベートで行ったらどんなに楽しんだろうと思われる場所に行く度に自分の英語力の無さに打ちのめされ、リトリートが終わるとストレスで持病の潰瘍性大腸炎が悪化した。リトリートだけではなく、普段の会話でも様々な内容で議論することが多く、新しい話題で会話をするとその度に自分の言いたいことが言えずに苦勞

した。100人くらい集まるパーティーに出向くと日本人は自分1人だけだったこともあった。隣に座った初対面の人と2時間くらい喋らないといけないこともあった。パーティーなんてもう二度と行きたく無いと思ったが、ヨーロッパはパーティー文化なので出席せざるを得なかった。皆でテーブルを囲んで議論して、最後に「タダシはとても大人しかった」と言われると落ち込んで泣きそうになった。そんな経験が続くうちに、あることに気づいた。それは、同じメンバーで生活をしていれば、必ず同じ話題が会話に登場するということだ。人間、生活様式が同じであれば、その中での会話の内容、イディオムも似通ったものとなる。だから、過去に喋った話題はどこかで必ず再び話題になるのだ。そこで私は一度うまく喋れなかった話題について、一体あの時英語でどんなふうにはしゃいだのか、あの時出てこなかったあの語句は英語で何と言うのか、深く考えたり調べたりするようになった。最初、外国語学習は階段を上る様に上達していくのだと思っていたが、実際のところそれは階段では無く、敷き詰められた石畳のようなものだった。それぞれの踏み石ごとに違う話題とイディオムが提供されているので、踏んだことのある石の数をできるだけ多くすること、要するにどれだけ多くの人とどれだけ違う話題で会話をしたかによって会話力は左右される。そのためには、できるだけ様々な人と、多様な内容で会話をするという経験が必要不可欠なのだ。

面白い人間でいること

様々な人と様々な話題で喋り続けるにはどうしたら良いだろう。言語的にハンディがある場合、話の内容を面白くしてオチをつけるか、面白い行動をとって皆の注目を浴びるのは良い方策だ。最初のリトリートで、各自の特技を皆の前で披露することになった。窮地に陥った私は大学時代に覚えたソーラン節を歌いながら皆の前で踊った。これには皆かなり驚いたようだった。2回目のリトリートの時、夕食の会話の中で自分のエピソードを3つ紹介して、その中に1つ嘘のエピソードを交えて皆に当てさせようということになった。この題目にも本当に困ったが、とっさに「僕は妊娠検査薬で妊娠チェックをしたことがある」というエピソードを思いついた。スウェーデンで妻が妊娠したときに僕が行った実話なのだが、これは皆にかなり衝 (笑) 撃的だったようで、Jonasも「いやー、ネガティブコントロールは必要でしょう」と言いながら爆笑していた。

できるだけ多くの人に自分のことを覚えてもらおうと思ったので、研究所の部門横断セミナーでは、どんなに研究分野が違っていても必ず毎回質問するようにした。さすがに毎回発言すると皆覚えてくれたようで、知らない学生やポスドクから声をかけられるようになった。異国で日々生活していると困ったことも次々に起こったが、その度に「この体験をどのように英語で

面白おかしく話そうか」と思いながら過ごした。息子が嘔吐下痢でカロリンスカ病院に入院したり、引っ越したアパートが改装中で風呂とトイレが使えなかったりしたときも、ちょっとしたエピソードを家族で共有したり友人に話したりすることで自分達の境遇を笑いに変えてみた。研究所の知り合いだけでなく、妻の妊娠と出産を通して知り合った助産婦や看護婦、整体師、そして娘や息子の通っていた保育所や小学校の先生、クラスメートの家族と様々な話をした。ヨーロッパだけでなく、中国、ネパール、インド、パキスタン、イラン、トルコ、エジプトといった様々な国の人達と家族ぐるみの付き合いがあり、それは英語という石畳を一つ一つ踏む貴重な経験だった。

研究は英語で廻っている

結局のところ、日々のお喋りの延長に研究の議論が存在するので、Jonas もラボメンバーもとにかく一日中何かを喋っていた。研究のテーマも、研究計画も、もちろんデータの解釈も、すべてが深く吟味されなければいけない対象であり、PIの仕事の大半はラボメンバーとの議論に費やされているようだった。このような議論を通して、現在の進行中のテーマがどのようなインパクトを持つのか、これからエポックメイキングな研究を展開するにはどのようなテーマを選ぶべきかが常にラボの中で議論されていた。自分の書いた論文の原稿の序章（イントロダクション）が Jonas の手によって格調高い文章に変化した瞬間が忘れられない。研究を遂行する上で一番重要なことは、「我々の研究によってもたらされた知見は、サイエンスにおいてどのような普遍的意味を持つのか？」という、普段のベンチワークでの思考より一段階高次の議論であった。これは時として、考えるよりも手を動かすことが重視される日本では経験したことのない思考トレーニングであった。

スウェーデン人を始めヨーロッパ人のほとんどは母国語以外に英語を使用しており、意志伝達手段として英語の使用方法も彼らから深く学ぶことができた。文化的背景が国によって全く異なるので、いわゆる「あうんの呼吸」とか「以心伝心」などという感覚は全く無い。状況説明はすべて相手に判りやすく、また決して感情的にならず理論的に行われる必要がある。その点、Jonas の語り口は常に穏やかで、論理的でかつ非常に明解で、私はいつも彼のように英語を喋りたいと思っていた。彼だけでなく、ラボメンバーだった Maggie や Christian、その他多くの友達が私の英語の師匠である。彼らと日々話すことで、様々なイディオムとその使い方を実体験によって学ぶことができた。良いデータが出たのでプリントして Jonas に見せたとき、彼が紙を指で弾いて「Fabulous! (素晴らしい!)」と叫んだ。ああ、この単語、こういう時に使うのか、とその時心から思った。

おわりに：ユーモアを持って生きよう

日本での再就職先が内定した2010年、最後のリトリートをポルトガルの港町で過ごした。このリトリートでは、帰国してからの研究者生活を捧げることを決意していたテーマ「神経幹細胞の動態と大脳皮質の進化」について研究発表した。恒例のエゾテリックなテーマは、スウェーデンやポーランド出身のポスドク仲間と共同して「エスニックジョーク」にまつわるクイズを計画した。どちらの発表も皆の興味を惹くことができ、この年のリトリートは本当に楽しかった。地中海の青い海と白壁の家々は美しく、そこで友人達と喋った日々が今でも忘れられない。

多様な文化を持つ人と一緒に仕事をするにはユーモアが必要だ。ユニークな人だと周知されれば皆が声をかけてくれるし、それで会話力も向上して、お互いの信頼関係も深まる。結局のところ研究は人が行うもの

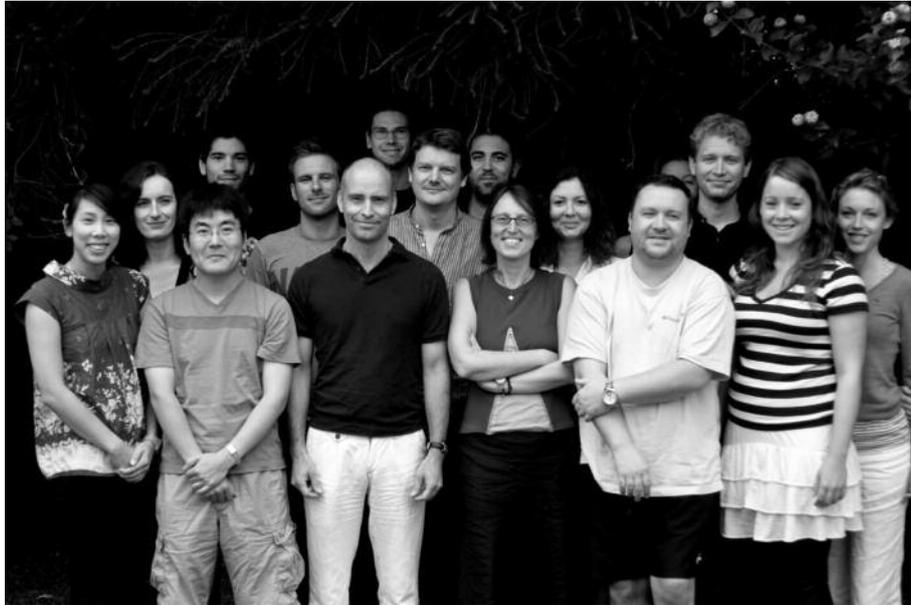


子供はすぐに外国語を覚えるから良い、とよく言われる。しかし子供は、文字通り生きる為に必死に言語を学習する。娘は辛抱強く英語を学び続け、3年後にはクラスメートと完璧に英語でコミュニケーションをとっていた。

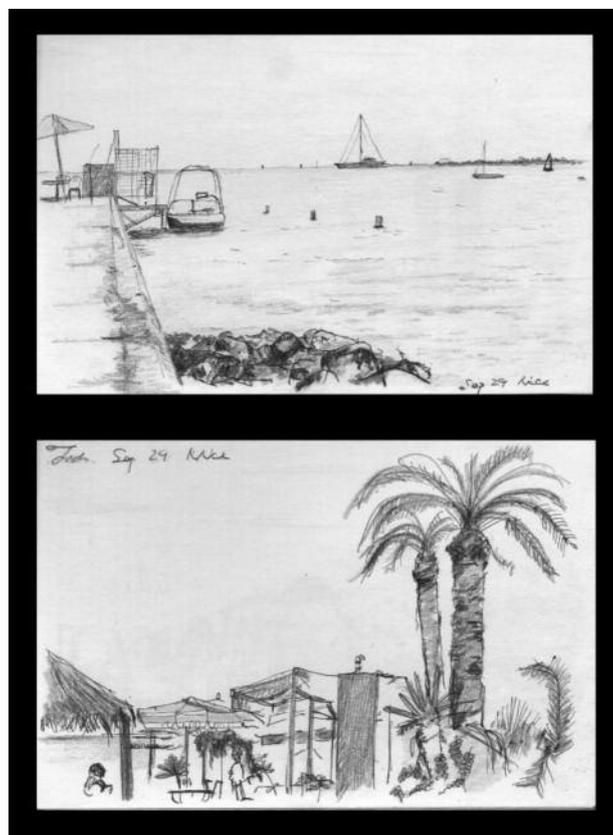
だから、その人物がユニークでなければ面白い発想は生まれまいだろう。ヨーロッパ人と比較して、日本人は明らかに勤勉で真面目だ。それはとても良いことだが、真面目なだけの人間ではつまらないと思っている。

振り返れば3年半ちょっとの留學生活だった。私よりずっと長く海外に滞在している人や海外でラボを持っている人、永住を決めた人達の話の聞くと心から敬服

する。今、さきがけ研究という研究予算の支援で知り合った方々も本当に素晴らしく、その聡明さとユニークさに心うたれている。皆不安定なポジションで必死に研究を続けている状況を見る度、自分よりも若い人達に恥ずかしくないように、常に高い意識とアクティビティを維持しつつ、誰も思いつかないユニークな研究テーマを探求していこうと心に決めている。



ポルトガルでのラボ・リトリートで撮った集合写真。前列左から二人目が筆者、筆者の右隣がボスのJonas。



2009年、ニースの海岸にて
留學中はカメラを持つ代わりに小さなスケッチブックをいつも持ち歩いた。